

金沢文庫蔵仏教説話集の表記体系

山内洋一郎

目次

- 一、資料について
- 二、説話部の表記
- 三、説経部の表記
- 四、送り仮名の様相

一、資料について

神奈川県立金沢文庫に所蔵せられている『仏教説話集』は、院政期保延六年（一一四〇）の識語を持つ仏教唱導資料である。その国語史的価値として、漢字片仮名交り宣命体の例として、また省文を多く含む漢字字体資料として、今までしばしば採り上げられてきた。このうち、漢字字体について、個々の事象を整理し、位置づけして、全体を見渡す報告がなかった⁽¹⁾ので、「金沢文庫蔵仏教説話集の漢字字体」と題して、筆者が既に報告したところである。片仮名字体についても字体表を⁽²⁾作成したので、一往字体については措くこととし、表記の全体像を描いてみようと思う。

字体の観点を除くため、引例は活字字体に改める。省文を含む異色ある字体は、改めれば、却って不都合を来す場合もないではないのであるが、印刷の便をも考慮することにする。

所在はページ・行で示す。それは筆者の改訂案による。

B 丁	A ページ	構成	
		本 篇	本 篇
(欠)	1	地獄 苦患 生死 無界 常 極樂讚嘆 十一面觀音 弥陀功德 法會 趣意 說 話 施主 段 (語識)	本 篇 (一)
(欠)	2		
(欠)	3		
22ウ	4		
17ウ	5		
18ウ	6		
19ウ	7		
20ウ	8		
21ウ	9		
(欠)	10		
(欠)	11		
(欠)	12		
(欠)	13		
(欠)	14		
6ウ	15		
23ウ	16		
7ウ	17		
2ウ	18		
5ウ	19		
16ウ	20		
8ウ	21		
9ウ	22		
10ウ	23		
11ウ	24		
12ウ	25		
13ウ	26		
14ウ	27		
15ウ	28		
3ウ	29		
4ウ	30		
1ウ	31		
1ウ	32		
(欠)	33		
(欠)	34		
(欠)	35		
(欠)	36		
(欠)	37		
(欠)	38		
(欠)	39		
(欠)	40		
(欠)	41		
(欠)	42		
(欠)	43		
(欠)	44		
(欠)	45		
(欠)	46		
(欠)	47		
(欠)	48		
(欠)	49		
4ウ	50	釈尊 略伝	付 篇
1ウ	51		
(欠)	52		

本書の組織は二日間の法筵の体を為している。表記の観点からはむしろ説話部とそれ以外（説経部）の二種にする方がよい。説話部は整っており、読み易いが、それ以外の部分はまだことに難解である。表記法は恣意的であるように見える。言わば、晴れの書でなく、曇りの書なのである。従って、表記体系と言えらるほどのものは出てこず、混沌とした様相を確認するだけに終わるであろうが、それはそれで一つの実態であり、他の資料に反射して、有益な材料を呈することもあろう。また、表記の歴史の中で、他に類例の少ない資料として位置を占めることにもなるうと思われる。

二、説話部の表記

説話部においては、通覧して、表記法が比較的安定していると見受けられる。表記体系が把握しやすく思われるので、まずこの分析を行うことにする。

説話は次に表示する七種のインド説話である。本文中に出典を記しているものもあるが、それに直接拠ったものとは思われない。出典未詳の一語を除き、唐の道世の編んだ『法苑珠林』か『諸経要集』⁽³⁾かに拠ったものであろう。そう判断する根拠と説話の内容については今述べるところでない。

仏教説話集

(原典卷数)

法苑珠林

諸經要集

A 造寺功德説話 (30) 31 ページ。全 24 行

雜宝藏經 (卷五)

卷三十八敬塔篇

卷三敬塔部

B 修塔功德説話 (32) ページ。12 行

分別功德論

卷三十八敬塔篇

卷三敬塔部

C 醉婆羅門出家説話 (33) 34 ページ。8 行

同經 (大智度論卷十三)

卷二十二入道篇

卷四入道部

D 優陀羨王説話 (34) 35 ページ。15 行。他に偈 2 行

雜宝藏經 (卷十)

卷二十二入道篇

卷四入道部

E 微妙比丘尼説話 (35) 39 ページ。53 行

賢愚經 (卷三)

卷五十八謀謗篇

卷九折交部

F 檀弥離長者説話 (39) 42 ページ。44 行

(賢愚經卷十二)

卷五十六富貴篇

卷六富貴部

G 無言太子説話 (42) 45 ページ。47 行

これら説話部の一例として、説話 A の冒頭を掲げてみる。下段に直接の出典である『法苑珠林』および更にその原典『雜

宝藏經』の漢文を置く。

雜宝藏經云、昔舎エ國中、有二長者。造塔寺_ニ後ニ命終

○雜宝藏經云、昔舎衛國中有一長者、造立塔寺、後時命

テ、魂_ニ切利天ニ生_リタ。威德巍巍_ニテ、光明熾盛_ナ。飛行自在_ニテ、

終、生切利天。

(法苑珠林)

无量ノ快樂ヲ受_ク。

○舎衛國有二長者、作_ニ浮図僧坊、長者得_レ病、命終生_ニ三

十三天。

(雜法藏經)

右の対照を見れば、傍線部を修辭的に増補し、他は原拠の読み下しに近い形になっていると認められる。「有一長者、造塔寺後ニ」の句は中でも原拠に近い。他の部分にも小異はあるが、かなり近い形である。

もう一例引こう。ここは片寄氏も引かれたところで、『法苑珠林』による。『今昔物語集』卷一の第二十八語はその大旨忠実な読み下しであるが、仏教説話集の方は出入があり、前半は詳しく、後半は簡略にかつ表現の意図を変えている。前半を次に記す。

仏在世時ニ、サエ國祇恒ニ一ノバラ門アリ酒ニ酔テ、正念ニ非シ
テ仏所ニ至ヌ。酔ニ狂テ比丘ト作テ而在リ。仏阿難ニ勅シテ法衣ヲ
着テ、戒ヲ与ツ。其バラ門既酔醒已テ大ニ嘔・悲・シ・驚而去ヌ。

去。

右を見るに、やはり増補部分が多く、傍点部のみ意味を変えている。増補は、説明を加えて平易に理解し易くする配慮が見える。以上のような原拠漢文との関係が見られる。

さて、表記の点では、次の諸点が検討の対象となるであろう。但し、原拠漢文との直接の対比は右の概観にとどめ、以下の方法とはしていない。

一、語句の順序—日本語の語順と漢文の語順—

1、自立語と自立語 例、着法衣—法衣ヲ着テセ

2、自立語と辞 例、非正念—正念ニ非ズン

二、宣命体表記—大字と小字双行の諸相—

三、漢字表記と片仮名表記

1、漢語 漢字表記を基本。その中の片仮名表記。

2、和語（自立語） 漢字表記を基本。その中の片仮名表記。

3、和語（辞） 片仮名表記を基本。

四、送り仮名と振り仮名

1、送り仮名

全訓送り仮名 捨て仮名 用言送り仮名

2、振り仮名

全訓振り仮名 部分振り仮名 辞の部分表記

五、記号（反読点等）

六、字体・書体

右の四まではこの資料においては重要である、六は既に別稿で述べたところである。

一、語句の順序

ここでは、漢文式語序と日本語の語序の相違が、表記法にどのような様相を示しているかを見ようとするものである。説話部分には原拠の漢文があるので、それに牽引される面があるのは当然であるが、説話部分以外でむしろ漢文式語順の表記が多い（後述）ので、結局は、内容との関係から生じる文体の問題である。漢文式語順をA型、日本語の語順に従うものをB型とする。引例のページ行を括弧内に示す。必要な時に濁点を施す。

1、自立語と自立語

説話Aにおいて、A型のうち対象語を採る格（ヲ格）の例に、

造塔寺後ニ（三〇二） 〔圖法テ（三一三） 得須陀洹果（三一三）

「有・在・無」の主格に関する例は二例、

有一長者（三〇二） 辟バ有人久ク廁ニ往セム後ニ（三一六）

所に関する例は一例存している。

遠ク在空中テ近ク地ニ至事（三一四）

このうち説話の冒頭（三〇二）と終尾（三一三）に四例集中しているのは、原拠に引かれたことと、要点・骨格のみ示せば良い場所であるからである。これに対しB型は説話の展開部分に多い。

- 無量ノ快樂ヲ受ク (三〇四) 菩提心ヲ不念シテ (三〇四) 夫ヲ恋ヒ思フ (三〇四) 其ノ塔寺ヲ掃治ス (三〇五) 其ノ遺妻ヲ見ムガ為ニ (三〇七) 草庵ヲ驚ス (三〇九) 妻夫ヲ迎テ (三〇九) 塔寺ヲ造リキ (三〇一〇) 遺身ヲ見ガ為ニ (三〇一〇) 涙ヲ流シ声ヲ出テ (三一〇) 无キ止ニ身ヲ穢サムヤ (三一〇) 本願ノ伽藍ヲ可奉崇シ (三一〇) 我昔存生ノ家ニ有リ時 (三〇一) 我ト汝ハ一懷ニ有シ (三〇五) 淨処ニ有ラム其時ニ (三一〇) 人間ニ在リキ。廁ニ在ガ如シ (三一〇)
- 切利天ニ生タ (三〇三) 今此天ニ生タリ (三〇六) 空ノ上ニ落ルケ (三〇八) 諸方ニニホヒ (三〇八) 今天上ニ生タ (三〇三) 本郷ニ下リ来レル (三一〇) 地ニ不来テ (三一〇) 遠ク空ニ住ル (三一〇) 近ク地ニ至事 (三一〇) 久ク廁ニ住セム (三一〇) 本ノ廁ニ往キ (三一〇) 上天ニ生レタ (三一〇) 汝我カ天上ニ生テ (三一〇) 本ノ天上ニ昇リ (三一〇) 一ノ 同天ニ生テ (三一〇)
- ヲ格についてA型・B型の相違を見るに、A型では「塔寺」「法」「須陀洹果」という一語であるのに対し、B型には、更に「無量ノ快樂ヲ」「其ノ塔寺ヲ」「无キ止ニ身ヲ」のように連体修飾語の付く例があることが注意される。ニ格においてもA型は「空」一語であるのに対し、B型では「存生ノ家ニ」「此天ニ生タリ」「空ノ上ニ落ルケ」などと、同様である。このことは一つの条件として挙げうるものである。漢文式に表記することは、動詞を先ず記すことであり、読み下し文での動詞までに文の成分が多く入らぬほど、A型になし易い道理である。
- ここで、他説話の状況をまとめて見ると、説話Aとほぼ同じ態度で表記されていると言える。ヲ格のA型では、説話の後尾に

後ニ仏前ニ住詣、即聞法、得阿羅漢故 (三五四)

仏為ニ説法出家テ得シ阿羅漢、阿難見已而、白仏言 (四一三)

四人時ニ得阿羅漢、……干今逕九十一劫^ヲ。乃至今日値我、得道云々(四二五〜七)
 などと類型が見られ、説話の中にあるものは左の四例にすぎない。

挙声テ(三七二、三七四) 入地獄テ(三九二) 為地リ(四〇〇)

主格に相当する「有・無」については、説話の導入部に、

其王有夫人リ(三四五) 有キ五比丘(四二一)

この二例を見る。説話中でのA型は「有限リ」(三四四)「无船テ」(三六九)の二例があり、他に「国王アリ」(三四四)「子无」(三五八)の如きB型は十二例を数える。このうち次例は興味深い。

分別功德論云、昔サエ城有夫妻兩人アリ(三二一)

「有夫妻兩人キ」とでもするつもりのところを、「兩人」の語の介入により下に「アリ」を置かねばならぬような意識になったものであろう。A型からB型へ移行したもので、結果的には「有」を衍字とすることになる。

この他のA型に入るものは、左の一例のみである。

然而至于今者、无言ノ非人ト成タリ(四三一)

以上の各A型に対してB型の全例を示すのは繁瑣であり、漢文の読み下しではないので、漢文化して語序の変わるものかどうかの判断のつきかねるものも少々存している。B型の数値はA型の十数倍存するとは言えよう。そして、A型が動詞に対する位置の語が単語である場合に限られることも見てとれるところである。「よもすがら」に漢語「意夜」を宛てる(色葉字類抄)が、その用字法が説経部(一〇四)にある。それが説話部で「夜竟泣悲テ」(三六五)となっているのも、読み下しの傾向に添うものである。

2、自立語と辞

『今昔物語集』『打聞集』等において、「令」「不」などの辞を用いる時、「令修」「不立」などと漢文形式を採ることが多

い。漢文式表記の影響の濃い本書にあっては、当然A型が多いのである。

返読表記の可能な辞として、本書に次のようなものがある。

不 未 不能 非 可 令 被 難 雖 依 以

これらが語順の点でどういう様相を示しているかを、見てゆくことにする。できるだけ説話部の中での全例を示すことになるが、「不」など例の多いものは、一部を載せることになる。

〔不〕 全て返読——A型である。

菩提心、不念シテ只日夜ニ夫ヲ恋ヒ思フ (三〇四)

君ハ不レ知ヤ。我ハ即汝ガ夫ヲ (三〇十) 何故地、不レ来シ (三一二)

「ズ」の活用形で読む例は多量であるので、次にジを示す。

彼レヲ哀ガ為ニ不レ自害ジ云テ (三七五)

不如ニ我レ若シ生シ人界ニ有ラム時ニ、都テ更ニ物不云シ念ヒ (四五六)

このようにA型で安定している。しかし、「不レシテ念ニ菩提心ヲ」とは記されていない。つまりA型といっても、直接につく動詞との関係においてのみである。

〔不可〕 漢文調の濃い形式である。

更不レ可ニ往越云々 (三七三) 七宝不可称計 (四一一)

〔不能〕 A型である。「能」の用法としてはA・B各一例となる。

人ハ其身甚憂穢ヲ。不能寄近ス。天ハ其ノ依報尤微妙ヲ。所以ニ遠ク在空テ、近ク地ニ至事不能ヲ (三一三、四)

「不能」の後例はフノウとも読めるが、やはり統一しておきたい。

後例が「能」としてのB型を採ったのは「遠ク在空テ、近ク地ニ至」全体を承けるため、A型に記しえなくなったためである。

〔未〕 A型1例のみ。再読するのかどうか明らかでない。

互本意未遂^テ生涯ヲ別レ去リム (三二六)

〔非〕 A型1例、B型2例となっている。

□等ノ七宝ハ是レ輪輸聖王ノ依報ノ宝也。今非所出ヌ (四〇一)

善悪ノ諸法ハ往因ニ非ト云事无シ (三八六)

藏ノ内境ノ間ニ七宝充滿ニ非ズ (四〇三)

A型の例は檀弥離長者説話に入った七宝の説明で、やや固い文体の中にある。B型の例は、一つは二重否定の複雑なものと、一つは「藏ノ内境ノ間」の句があるものとで、「非所出」の簡単な構造とは異なっている。A型には表記しがたいものがある。

〔无〕 これは「不」の類とは異なり、体言に伴い、その非存在をいう詞である。ただA型もB型も多く見受けるので、ここで整理しておきたい。

A型は左の2例の外は、複合形容詞として固定した感がある。

入黒闇地獄、无有出期^{云々} (三三九) △説話外、經文▽

大河ヲ。无船^テ而渡。 (三六九)

无限^シ (四二二)

无極^シ (三四六、三四二、三六四、三七四、三八九、四〇五、四二九、四三三、四四九)

无比^シ (四二四) 无雙^シ (三四一) 无由^シ (四二二)

B型には「体言+无^シ」と「……コト无^シ」の二種がある。

○出離ノ期无^シ (三四一四)

他ノ男女ノ子无^シ (三五八)

男女ノ親族无シ (三三五 8) 只辺界ニ一人ノ近親无シ (三五五 10)

可レ渡キ様无シ (三六 10) 見ニ甲斐无シ (三七 1)

存テ甲斐无シ (三七 4) 唯一人ノ子无シ (三八 8)

更ニ王宮及ヒ朝ノ内ニ无シ (四〇 6) 惣テ言語无シ (四二 12)

我が愁苦无カ^{ハムニ} (三八 11) 何故カ……言語无ツル (四四 10)

○善悪ノ諸法ハ往因ニ非ト云事无シ (三八 6)

日月ノ光ヲ見ト^{コト}无シ (四五 3)

右の範囲で言えば、「……コトナシ」はB型のみであり、他のB型例は、「可渡キ」「一人ノ」といった修飾句のある場合、「見ニ」「存テ」「王宮及ヒ朝ノ内ニ」という補語のある場合、「甲斐」「愁苦」「言語」という漢字二字表記の和語漢語、このようないずれかである。眼を転じて言えば、A型は、体言一字に限られ、熟合の傾向がある。「无出期シ」のみ「出」という修飾がつくが、これは出家功德経の経文のままである。

〔難〕 これは「无」のA型に似ている。

落ル涙難禁シ (四三 3) 悲^レ涙難禁シ (四三 14)

无益ノ言難忍シ (四五 5)

〔可〕 全てA型である。

願ハ弥勇猛ノ心ヲ以テ本願ノ伽藍ヲ可奉崇シ (三一 11) 可シ尔 (三一 2)

四徳ノ菩提可得シ (三四 1) 可キ産期至ヌ (三五 12)

可渡キ様无シ (三六 10) 現世当世ノ口業ヲ可慎シ (三八 7)

将来可悲シ (三八 8) 我最後可悲シ (三八 11) 皆退転ヲ可シ成 (四二 3) 大王位ヲ可讓^キ (四二 12) 即可還シ (四三

11)

既掲の「不可」も含めて、全てA型は当然のようであるが、その接する動詞にかかってくる目的語などは、全て上に置かれ、「可」は動詞の直上に記されるにすぎない。読み下し文における僅かの漢文色にすぎないのである。

〔被〕三例ともA型であるが、一例が可能の意であることは、注意される。原漢文に対応する句がなく、修辭的増補部分である。

山ニ被放捨ル (四四二) (四四九)

△受身▽

即心迷ヒ臆サケ物不被云ヌ (三七八)

△可能▽

〔令〕全てA型である。

其シテ善道ヲ令修メ後ニ此天ニ令生テ共ニ夫妻トセ (三二六・七)

天ノ通力ヲ以テ彼人ヲシ……常ニ仏塔ヲ令修治メ……生天ノ業ヲ令殖メツ (三二八)

願ハ大王、我ヲ許テ令出家 (三五一)

鐵ノ針ヲ以テ其頸上ヲ刺テ終ニ令命終ツ (三八二)

大王尔時ニ太子ヲ將テ深山ニ令放捨給。即御共ニ令隨順ル仕卒亦衆多ナ (四三八)

漢文法に準ずれば初例は「令修其善道」となるものであろう。「令修」のみは漢文式であって、實質は漢文になりえないものである。

〔如〕「如此シ」4例を除けば、A型5、B型3となる。

○諸ノ罪惡其身ニ集トコ如大海 (三三八)

地ニ落コト如雨シ (四一五)

崇メカシツク事如白玉シ (四二一〇)

苦ニ迫セシ如死シ

(四五三)

夏ハ熱炎ノ苦ニ遭テ如湯シ (四五四)

○人間ニ在リキ。廁ニ在ガ如シ (三二八)

観見ルニ生天ノ宿因上ニ云ガ如シ(三二一〇)

影ゲ地ノ底ニ見ユル清キ水研ケル鏡ノ如シ(四一二)

「……コト——ノ如シ」ではA型になり易いが、その体言に「清キ水研ケル」という修飾がついてはA型になれないのである。
「……ガ如シ」では「……」が数文節より成る常から見ても、B型も当然であろう。

〔以〕 A型3例 B型10例

○以白銀地ト作リセ(四〇〇八) 我レ以レ火食ヲ不レ設ス(四一六) 以レ火作レ食給ハ(四一七)

○天眼ヲ以観見ルニ(三〇五) 勇猛ノ心ヲ以テ(三一〇) 勇猛ノ心ヲ以テ……伽藍ヲ可奉崇シ(三一二) 天眼ヲ以テ見ルニ(三二四) 天ノ通力ヲ以テ……令修治メ(三二七) 天眼ヲ以テ観見ルニ(三三〇) 鐵ノ針ヲ以テ其頸上ヲ刺テ(三八二)

金銀ルリ等ヲ以作リ(四〇四) 黄金ヲ以作リ(四〇九) 紺ルリヲ以テ純ニ為地リ(四〇一〇)

A型は説話Fに限られている。

〔依〕 A型1、B型6例である。

○依其功德、從其以來生々ニ惡道ニ不墮ス(四二五)

○塔寺ノ功德ニ依テ(三〇六) 其ノ造立供養ノ功德ニ依(三〇二)

昔ノムツビニ依テ(三一五) 其ノ報ニ依(三九二)

彼ノ罪報ニ依テ(四五二) 彼ノ念力ノ功德ニ依(四五七)

以上をまとめてみるに、漢文の辞類で、「不」「被」「令」など日本語でも助動詞でも読まれるものには、読み下し式の「あら不」のような表記法は見られない。他の「非」「不能」「依」「如」など実質は助動詞であっても、形では自立語に見なしている場合に、B型が出現する。その場合、これらが直接に接する用言・体言の類が修飾語を持たない単独の場合には、なおA型を多くとるが、語句の多く付く場合はB型になる。文の終尾に用言がきて、その末に辞がつくという日本語の性質から見

れば、当然のことではある。

二、宣命体表記

既に数多く例示したところで知れる如く、本書は宣命体表記を採っている。漢字は誤写の僅かを除けば全て大字である。助詞・助動詞・送り仮名は大旨、小字双行である。それにも大体の傾向がある。

○後ニ 无量ノ快樂ヲ 掃治ス

○命終シ 生リタ 熾盛リナ 不來シ

不念シテ 見ムガ為ニ 人天ソト

○巍々ニシ 落ルケ 交ヤム (穢サムヤ)

○來ナリ 修治カセシ 其シテ (離ルラム)

右は傾向であつて、括弧内の如き例外も存する。字を書くべき紙面の隙による例外の発生などがあり、傍訓と区別のつかぬ場合もある。片仮名書き自立語が「出家ヲサゲム制止」(三三七)のように書かれることもあり、大字表記、例「昔ノムツビニ依テ」(三一五)、との相違は見出しがたい。

宣命体表記としては、さしたる問題を見出さない。

三、漢字表記と片仮名表記

漢字片仮名交り文において、漢字は、その本性のまま、概念を示す機能を中心とし、片仮名は、表音文字として、漢字では表現しえない日本語の特性部分、助詞・助動詞・活用語尾の表記に中心がある。但し、漢文のよみ下し文ならば、この通りであろうが、日本語の表現としての文章表現においては、この異種の文字の選択には、一面的に統一できない現象が起

てくる。まず、表記の安定性の強い説話部で、それを検討してみよう。

1、漢語

漢語は漢字表記されるのが当然である。「夫妻、兩人、一人、戒善、三宝、信敬」等枚挙に違がない。その中において、片仮名表記の漢語が僅かにある。

サエ城(三二一) サエ国(三三〇) 舍エ国(三九五) 南エフ提(三二五) ハラ門(三三九・一二・一三) ヒハシ
仏(四二一)

ルリ(三九二、四〇三・一四、四一三) 紺ルリ(四〇九)

これらは「舍衛」「閻浮提」「婆羅門」「毘婆尸仏」「琉璃」とあればよいところである。それが仮名書きにされたのは、この漢字が表音仮名として用いられていて、意味を喚起しないために違くない。片仮名書きでも差し支えなく、労力が軽減されるというものであろう。同類で漢字書きのものに、

盧留城、優陀羨(三三四) 檀弥離(三九五) 且弥離(三九八・九、四〇五・六、四一四・一三) 弥離(四一八・一〇)

波羅奈国(四二八)

などがある。従って、漢訳梵語のうち表音式のもものが全て片仮名表記になるのではないが、片仮名表記の方からは右のように言うことができよう。

2、和語(自立語)

和語(自立語)の片仮名表記例は、説話部分で意外に少ない。

香薰テ覆シ諸方ニホヒ(三〇八) イザ彼ノ父ノ梵志ノ家ニ往テ産ムセ(三五三)

昔ノムツビニ依テ(三一五) 我ガ癡闇ヲナク給ヘ(三八五)

崇メカシヅク事(四二九) 王宮ニカシヅイテ(四三五)

无言ノカタワヲ答テ(四三九) 一人ヲ(三七七〇) 女人ヲ(四四一四) 穴ウレシ(四四四) 落ルケ(三〇八)

右のごとくである。ここには先ず感動詞「イザ」が仮名書きであるのは当然の姿として認められよう。「去来」を宛てる用法が既に存している。次に形容詞「ウレシ」もその主観性の強さから漢字表記がびったりしなかったものと思われる(黒川本色葉字類抄に「嬉」以下全六字を載せているが。動詞「ニホフ」も適当な漢字がなく、「勻」字から「勻」(国字)に結びつく過程を小松英雄氏が詳細に追求されている。ここで仮名書を採用しているのもうなずけるのである。動詞「かしづく」も王朝的な主観性のまつわる語であって、前田本色葉字類抄では「饋」以下全十一字を載せ、その中の「傳」に後では傾いてゆく。ここではまだ漢字との結びつきが強くないと思われる。二例の「リ、」には共通性がある。伊勢物語の「修行者あひたり」以来の、出会う相手为主体におく特殊な表現である。仏教説話集に「値」六例「遇」五例の「あふ」があるが、この中には右の用法は含まれていない。このどちらの漢字も適当でないために、片仮名書きとなったものであろう。「ムツビ」は、「昵コトヒム」(一一一〇)「昵シキ」(六一)と同じく「昵」を採用してよいところである。黒川本色葉字類抄では「昵ムツフ」以下六字を載せている。但し「昵」を採った二例とも全訓送り仮名になっている点に、「昵」の訓としての固定度の弱さが見られるのであって、「ムツヒ」という仮名書も存立しえた基盤のあることがわかる。「カタワ」は複合語で後世は宛字に落着くが、当代では固定的漢字表記を持たなかったのであろう。残る「ナグサメ」「カケル」は漢字表記であってもよいと思われるが、片仮名書きの積極的理由は不明である。

以上の如く、少数の片仮名書き例には大体の理由を見出せるようである。和語漢字表記の誤用例として、宛字のあることも見逃せない。説話部では一例存する。

穴ウレシ(四四四)

「浄潔香薰ノ无レキ止身」(三一九)は語源に分析した表記例である。

3、和語(辞)

助動詞・助詞は漢字表記することのむづかしいものであるが、漢文に対応するものがあれば、漢字表記もされる。そこで、本書説話部に見る範囲で、逐一記してゆきたい。

「る・らる」受身に「被」を用いる（既出）が、仮名書きもある。中で、次例は「ころされ」又「と読むべきであろう。

夫毒蛇ノ為ニ螫シ敏ヌ（三六三）

説話部外であるが、「或時ハ四重ノ黒雲ニ厚覆テ」（五一）も「おほはれテ」と読みたい個所である。

「しむ」「令」を用いる（既出）。仮名書きがない。

「ず」「不」を用いる。説話部分には「不」を用いない仮名書のみ例を見ない。

「じ」「不」を用いて「シ」を補なう。「一言更ニ不云ト」の如くである。仮名書のみ例はない。

「む」「共ニ夫妻ニセ」（三二七）のように意志の場合も「将」を用いない。本書で相当に漢字表記の辞があるにも拘らず、

「将」のないのは興味深い。なお、「同ク座ヲセム欲ハ」（三一〇）のように「欲」が説話部外に3例計4例存している。

「べし」「可」を用いる。説話部分では仮名書を用いない。

「なり」指定には「也」を用いる。但し、説話部分では二例である。

仏ハ三達五眼ノ徳ヲ具テ衆生ノ苦ヲ濟給者也（三八四）

七宝ニ有二種、一者……七虎碧也、二者……七主兵神宝ヲ（三九二）

右の後例は説話Fの中に七宝の説明が入ったものである。説話部に「ナリ」は数多いにも拘わらず、「也」をほとんど用いないのは、興味深い。

「の」「漢字一之」には連体格助詞「の」に近い用法があるので、しばしば「の」意味で用いられる。それが、説話部分で

況長大過半之比ニマテ欽王宮ニ居給ハ乎（四三二）

という一例のみである。これも異色を感じさせる一つである。

「か」「欵」が二個所用いられている。

切利天ノ善法堂欵ト思ユ(四〇12) 浮ル水欵ト思テ(四一1)

「より」「從」がある。「仮名書の方が多い。

從其以來生々惡道ニ不墮ズ(四二5)

「かな」「哉」が五例あり、仮名書は見当らない。

哀哉、昨ノ夜ハ荒野テニシ年来ノ夫ニ後キ。(三七2)

「や」「乎」が一例存す。

王宮ニ居給ハ乎(四三7)

「て而」「は者」「に於」「を於」については後述する。

以上が漢字表記に係わる助動詞・助詞である。「將」「也」「之」など意外な感の受けるものもある。これらのうち「也」「之」は説話部分外では多く用いるのである。

送り仮名・振り仮名については、全巻を一つにして後にとり上げる。

三、説経部の表記

説経部の例を二種挙げておきたい。

○唯牛頭馬頭ノ以鐵刀ヲ剝ハギ皮割キラム髓ニ極テ堪ヘ難忍難聞ク苦ヲ受ケ憂ヲ懷ケル輩ヲ逼ニセメ相ヒ遇フ時ハ苦患難忍事ヲバ不語相互カ
ニヒ抓ミカ碎キスデヲ断テ骨ヲ折コト狼者ノ如見ガ鹿一(四6)9)

○勇猛之志抽テキ清淨之誠凶仏菩薩之尊容写一乗経之真文其者何者世々生々人間之生難受无量広劫之間仏法之縁難結ヒ矣設
僅ニ有受人身時而生遇正教流布之世希ナリ(二八3)5)

右は既に見てきた説話部とはまことに異なっている。前者は、

以_二鐵刀_一ヲ剝_レギ皮_ヲ割_レ髓_ヲ極_テ堪_ヘ難_ク難_シ忍_ビ

とまず解してみる。漢文式語順の中に「堪へ難し」には和文の語順が見える。次いで「苦_ヲ受_ク憂_ヲ懷_{ケル}」とあって、和文の調子であるが、「不語」「如_レ見_ルカ鹿_ヲ」となっている。まことに目まぐるしく、語順のあり方が入れ交わっているのである。後者は大体漢文になっているといえよう。

抽_二清淨之誠_一、因_二仏菩薩之尊容_一、写_二一乘經之真文_一、

「其者何者」は「それはいかになれば」であろう。対句表現を織り交ぜるところにも、雄弁を競った様子が反映している。漢文式文章は多くないが、和文との中間状況の文章が続き、混沌としたさまを示している。本文の翻字がなければ詳細を伝ええないところである。

説経部分は右のごとくである。漢字表記と片仮名表記の交渉の問題については、この部分も豊かなものを持っており、用例を追加することにする。送り仮名と振り仮名の諸相については、全巻を見渡してまとめてみる。

一、漢字表記と片仮名表記

1、漢語

漢語で片仮名書は、次の如くである。

アスラ王 (二〇12)	アマタ如来 (二三8、四九6)	アマタ仏 (八11、四六9)	迦ヒラ国 (五一9)	サタ (二三9、二九8)	サタ王子 (二五11)	サハ若海 (二二6)	サン提ラン国 (二六3)	尸ヒ王 (五〇13)	ス羅 (二二4)
ハラ蜜 (二二4、二五12、五〇13・14、五一1・2)	波ラ蜜 (二二三)	ミタ (一九1)	ミタ善逝 (二六2)	ミタ	如来 (二六3・5・8、二七7、四六7)				
サコ (一九5)									

右のうち「阿弥陀、薩多王子、弥陀、珊瑚」には漢字書がある。一般の漢語で片仮名書のあるのは、次例のみである。
 親ソク(一一九)△親族四二、三五八▽ アクゴ(二二八)△期三三三、三四二、三五二▽
 仮名書の理由は把握できない。

2、和語(自立語)

説經部には和語の仮名書が多い。それをまず形容詞より並べてみる。同語の漢字表記があれば併せて載せる。

- アヤウ(四六四)△危四七四、危ミ二一四▽ ウレシ(四四四) ウシカル(五一一)△薬ウレシ四九六▽ オホツカナ(二九二、四七二) ヲモシロキ(二一二、二二一)△面白キ二一一▽ スカナシ(一一一) スサマシ(二一二、二二七)
 ナツカシキ(二〇五) ナツカシク(二一二) ナツカシ(二三二)△无カシ三二▽ メテタキ(二一三、二二一、二二六) △メテタウ(一九八・一一)△好^{イチャウ}二八一▽ ヤマシウ(四九四) ヲカシ(一一五)
- ここには明らかに情意語が集中している。われわれはこの中のいくつかに漢字を宛てうるけれど、宛字であったり、無理な感じの伴うものである。「スカナシ」は実例の少ない語である。形容動詞の、
 コマヤカナル(二〇七)

もある。動詞では、

- アカメラレ(二〇八)△崇三二二、四二九、四四四▽ アクゴ(二二八) アナツル(二四一) ウセ(五一一) ウツロフ(二二一) ヲコタラム(二〇六) カ、ヤカシ(一九六・七) カ、リ(五六)△懸ル三六三▽ カキアケ(二三六)
 △カキ拳レハ二〇五▽ 香ヲカク(二二六) カシツク(二〇九、一三五)
 カナハサル(二三二) カレ散(二三一) クツヲ、レ(一一五)
 クヒ(四一〇) クミ(二四〇、二〇五、四九五) クメル(四二) サカス(五八、一三七) サク(五六)△割^キ五〇一四▽
 シロシメセル(九一) スキ(一一四) ソコム(二二四) ソネム(二四二) ソハタテ(二二一)△崎二七二、四七

11V タ、レ (二一四) チリハメタル (二二八) ツクリケレ (二三一) △造四例、作八例V ツ、ムル (五九)
 ツラヌキ (五六) ト、コホリ (四九三) トヲサカリ (二二〇) トホシ (六九) トホリ (四九二) ナカムル
 (二〇七、二二二) ナケキサケフ (二二九) ナケケトモ (二三三) △歎^{キナケ}、歎、など十例V ヌレハ (二一四) 散リ
 マカフ (二二四) マナフ (四六二) ミカキ (二九二) △研四〇14、四一2) ユリ取り (二九九) ヲカム奉レハ
 (四七10) ヲシツ (二二二) △借四三14V

動詞もそれぞれ使用度数が少ないのであるが、「膝をくむ」「かしづく」「和歌をながむ」「(情) さかす」など複数例の
 仮名書は、この書の編者にとって漢字が考えられなかったことを示している。「(鹽) スキ」も名詞「スキ間」と併せてみれ
 ば、仮名書の方が安定していたのであろう。漢字表記が多い中に仮名書があるのは、「ツクル」「ナゲク」くらいである。他
 は訓漢字の固定に未だしのものが多いようである。

体言を次に列挙する。

イサミ (一一六) ウキコト (四二二) ウラ (五三) ヲトカヒ (二一四) カケ (二二二) △影ケ四12、影二〇6、四
 八4・8V カタナケシ (二九五) カハラ (二九六) △瓦^ラ二〇3、四八13、瓦二〇6V カフト (二四13) カホ (一
 三七) コマヒ (二九五、二〇二) サキラ (一三二、一四七、四六14) スキ間 (二〇八) スチ (四八) タルキ
 (二九五、二〇二) トハリ (二三六、二〇五) トヒラ (二〇四) △扉^{トヒ}四九1V ナキサ (四八5・9) ナケシ (二〇
 三) ナコリ (二九二、二二三) ナサケ (四一、五八) 花フサ (二二四、二三一) ヒトフサ (二三二) ハラ
 (五四) △腹^サ三六2、四八10V ヒサ (四六七) △膝^サ四2、一四10、三〇5、四九5V ヒチキ (二九五、二〇二・7)
 ムナツ、ミ (二〇三) △棟^{ムナツ}、ミ一九6V ヤマカ、チ (四六一) ヨロツ (八五) △万^ヨ四二9、万^ヨ一四9、二五3、二
 九11) ヨロヒ (一四13)

この中では、家屋名称の語彙が揃って仮名書きになっている。「棟^{ムナツ}、ミ」は「ムナ」のみ棟と応ずるもので、「棟」の

訓が「ムナツ、ミ」ではない。「初言」の「ウキコト」、「ヤマカ、チ」などは稀な語である。「影」「瓦」「腹」「膝」「万」などは仮名書にされた理由はつかめないが、全体としては、漢字表記しがたく思われ、抵抗を感じた語であろうと思われる。残りを一挙に示すことにする。

イカニセム(四二) 〆何為^〆 カハカリ(五10) サハカリ(四九5) サレトモ(九1) サレハ(二二3) サ
ル(九3、二二6、一四3、二二1) トテモカウテモ(一三7、一九3)

口語的表現が残っている。シカリ系の接続助詞などは「尔者」などで別に表記されている。

3、和語(辭)

説話部で採り上げたのは、次の漢字表記に関するものであった。

被令 不可也 之 欵 徒 哉 乎

ここでは、単に用例を追加するにすぎないものは省略し、新しい事象について述べる。

「ず」「未」は三例(説話に一例)存しているが、再読するかどうかわ明らかでない。

思ヒラ寂レバ未免火血刀苦ヲ(九6)

サハ若海ニ入レバ未ズ聞三有(二二6)

「ごとし」「如」が基本であるが、「若」が一例存する。B型である。

四州悪趣ノ若ハ苦ミ実ニ心モ不及(九8)

「む」「将」が一例存する。漢文体の個所である。

蓋以如此。具旨願文被戴セ、可奉読、将奉尺(二九10)

「ながら」「乍」は「ながら」と読むのであろう。四例存する。

娑婆ノ古郷ハ乍御座乍待口惜侍処ヲ(九3)

又夫人モ乍我更ニ其事ヲ不知ス (三四八)

乍然歎キテ懷、謬カウ漆ノ示語同スル人モ断リ (六一)

「より」「自」と「從」とがある。「……より……に至る」の例。

始メ自リ大施王至テ聽聞隨喜之老少ニ (四九七)

從宝頂仏至于燃灯仏 (五〇九) 從リ初メ尺迦牟尼至テ宝頂仏ニ (五〇八)

このように双方とも用いられる、次も同様である。

自ヨリ跌アラトホシ首ニ (六八)

任 (從の誤) 首至マテニ跌ニ (一〇一)

「べ」「当」も用いられる。2例である。

当シ知汝ガ愚癡ノ所致也 (七一)

皆当シ作仏資糧矣 (七二)

次に述べておきたいのは、漢文の助辞がそのまま用いられて、訓読されない場合のあることである。

〔而〕「て」の後に置かれる。

見ニ雜穢衆生ニテ而生恠咲断レ惡ヲ (二四一〇)

設僅ニ有テ受ニ人身ニ時ト而生ニ遇ニ正教流布之世ニ希ナリ (二八五)

前者は順接、後者は逆接である。逆接例は他に二例存する。

〔於〕「に」「を」にに応じて用いられる。数多く用いられている。

彼羅什三藏染ニ筆垂ニ翻ニ訳於草堂之露、 (七五)

碎ニイテ於骨髓ニテ此剋ニ可レ修ニ往生極樂之業因ニ (二八一〇)

これに「于」「之」「矣」などが加わる。漢文の文体に近い場合にこのような辞が用いられるのは当然ではあるが、唱導資料の全てに出るわけでもないのので、指摘しておくに足ることである。そこで、次のような「者」があってもよいことである。

十相好者、白毫相者、繞五須弥ヲ (二六八)

更にこの「者」は仮名書の語にも接する。

彼ノ時ノ大妻ト者即汝身是カ (三九四)

五百由旬ノヤマカ、チト者一度モ…… (四六一)

次の「者」は接続助詞の「ば」であろう。

若誤テ説カ此如来之功徳ヲ者、言語道断シ心行処滅ス (五〇三)

以上の如く漢字表記された和語の辞を見てきた。漢字表記されない助詞・助動詞のあることは言うまでもない。余りに詳細になるので、そこまでは及ばないこととする。

四、送り仮名の様相

仏教説話集は送り仮名振り仮名表記の点でも特色を有している。全訓送り仮名とか捨て仮名とかは今昔物語集を始め多くの書に見るものであるが、このような小冊子に多種多量の送り仮名が見られるのが特色となっている。以下、主に例を挙げて展望することにする。

一、全訓送り仮名

1、名詞

汗コホセヲノ (一〇二)

跌ウツナ (六八、四九二) 〱 跌一

雨アメ (五一) 〱 雨二

様アリ (八七、様九二) 〱 四

懐ウチノ

(二一六) △懐1▽ 紙カミ(五九) 牙キラ(四一〇) 妃キト(五二四) 桜ヲサク(二二一) 屍ハネカ(三七七) △屍二
 1▽ 姿ニモカ(二三三) 栖トシテカ(二四一) △栖カ3、スミカ1▽ 宝タカラ(一九二) △宝2▽ 流ヒバ(四三) 契
 チキ(四二二) △契リ1、契1▽ 贖ミツ、(四七四) 歎キヲ(六一) △歎3▽ 浪ニミ(四八七) 虹ニシ(四九一) △虹1▽
 階ハシ(四九二) △階5▽ 羨マス(二一五) 務マツリ(四三三) 棟ムナツ、ミ(一九六) △ムナツ、ミ1▽ 目メ(四八〇)
 根モト(七二) 齡ヨハヒ(二二二) 万ツノ(四二九) △万4、ヨロツ1▽

2、副詞

弥イヨ(四五) △弥ヨ2、弥4▽ 差ノサマ(四二一) 遮ハサハアレ(二九一) 相互ヒニ(四八) 何、ガニ(四三一) △何か1、他
 あり▽

3、形容詞・形容動詞

楽ウレン(四九六) △仮名書2▽ 寂シツカ(六二) △寂3▽ 猛キタケ(二二二) 利トキ(五一) 饒ユタ(九一)

4、動詞

務クイソ(一一二) △務ク1、務1) 奮^{ハヒ}(二二四) △奮ヒ1▽ 懐イ(四四) △懐3▽ 傾カカタ(二二二) 通カヨ(二四七)
 △通1▽ 聞キ、(二二〇) △聞25▽ 割キラム(四六) 萌カクカカル、(四三) 嘖ヒソム(四三三) 凝イテ(二九四) △凝
 1▽ 滯サケヒ(六九) 蝻サ(二六三) 粹サシハサ(二七一) 布シキ(二六三) △布1▽ 居テスエ(三六三) 澄スマサ
 (六三) 逼セメ(四七・一) △逼ムル1▽ 備ソナル(四六四) △備2▽ 断タエ(六八) △断4▽ 掴ツカ(四八) 留メテ、
 (九七) △留9▽ 撫ソナテ(六二) 並ルニラフ(二四〇) △並5▽ 成ナル(二二九) △成9▽ 把ルニキ(五七) 悪ニクム(二二
 10) 抽^テスキ(二五三) 吞ノミ(二三三) 登ノホリ(二〇八) △登1▽ 剥ハキ(四六、四〇) 励マシク(二九六) △励1▽
 逕フ(三六一) △逕9▽ 纏マタルハサ(四三) 亡マロ(三六三) 息ヤミナム(四三三) 趁リワシ(一一一) △趁シリ1▽

折ラル(四九)

右の中には「雨アメ」「目メ」を始め、訓漢字として早くより固定し、付訓の必要性を感じさせないものも多い。

栖スミカ——栖カ——スミカ 万ツヨロ——万——ヨロツ 弥イヨク——弥ヨ——弥

このように二・三種の表記形式を共用して、必ずしも初出が詳細でないものなどがある。資料の初出に付訓し、後に省略するのならば一つの方針を見ることができ、本書ではそうではない。かなりに恣意的である。

務マツリ——務クイン 割タニム——割敏ラシ(五〇14)

居テスエ——居イ 聞キ、——聞イヒ(一一12)

などは同字に異訓の存する場合なので、訓を確かにする目的はあったと思われる。音か訓かの場合もあろう。また、

躑ツ、 楽ウモシ 務マツリ

などは難訓字のよみを示したものであろう。

以上の事情は、捨て仮名や完全付訓にも存することというまでもない。

二、捨て仮名

送り仮名のうち、用言以外に付せられたものを採り上げる。この事項についても本書は豊かな例を持っている。よみの推定部分をひらがなで記す。

1、名詞

台ナ(二七一) 台合二 影ケ(四12) 台カケ1、影V 彼レ(三七五、四二六) 昨日フ(六三六) 台昨1V 雲リ(二二三)
 言ハ(九八) 台言6V 菓ミ(二三三) 境ヒ(四九五) 台境2V 榻ト(二八12) 栖カ(二〇二、二二五・七)
 台(二二・八・11) 貯レ(二二七、二八12、三九七) 台貯1V 類ヒ(二五一、二九12) 台類2V 持ト(四九10) 年シ

(二四一) (八年5) 輩ともが (四七) (八輩9) 柱はしら (四九一) (八柱2) 花はな (二二九) (八花9) 一ひと (三〇四、他ア (一七) 一ひと (二一八、一四三、二二五) 響ひび (四八七) (八響1) 二ふた (三七三) (八一) 二ふた (三六八) 仏ほと (三五七) (八仏 18) (二九二) (八辺2) 暗まな (四六一) 三み (二二二、二四六) 昔むか (六二、二六三、三九五) (八昔14) 胸むね (四八〇) 夜よ (三四九、三六一) (八夜2)

2、副詞その他

乃いま (三五二) 弥いよいよ (三一、三一、三七八) 凡おほよ (四九一) (八凡3) 必かなら (四九九) (八必3) 悉ことごと (三八〇) (八悉3) 併しかしな (四九八) 併あ (四九二) (八併2) 但ただ (八四、三九五、五〇四) (八但4) 鎮とこしな (五二) (八鎮1) 速すみ (六一) 先ま (一四〇、三二〇、三六二、三八二) (八先2) 漸な (一一一、他ア) 能よ (三二八、三四五、三五五、三八九) (八能2)

このような状況の中で、「自」については、次のようになる。

自み (三四二、三八一) 自み (四〇七、四二二・六) (八自2)

「おのづから」との区別の為であるが、本書には「おのづから」の意の例はあるものの「自オ」とは記していない。

跌ニ 苦ツ 集メ (一〇一、一〇二)

この「苦ツミ」も同様であろう。そこで「我身苦ツミ難ニ 堪タキ」(四五)の「ノミ」は文意上限定の助詞ではなく、「クルシミ」ではないかと思われる。

三、全訓振り仮名

全訓振り仮名(完全付訓)は全訓送り仮名と厳密には区別できない場合があるが、位置により分けてみた。その用例を列挙する。

1、名詞

- 梁ウツハリ (二九五) △梁1▽ 項コナンニハ (二七11) 辟カキ (四九1) 觜クチノ (四八3) △觜ハシ 四八10▽ 以来コノカテ (二四4) 声コエ (一三2)
 △聲5▽ 立石イシ (四八13) 翼ツバサ (四八11・11) 扉トビラ (四九1、二〇4) 針ハリ (五7) △針1▽ 再マシ (四九9) 窓マド
 (二九12) 藁モミチ (二〇6) 寡女ヤムメ (三〇4) 雪ユキ (八2) △雪1▽

2、形容詞・副詞

- 舞アチキナン (二八12) △舞1▽ 敢アヘテ (二三3) △敢テ3、敢1▽ 好メテクウ (二八1)

3、動詞

- 訪ウツヘ (二八11) 惟フモヘ (五〇1) 駈カガ (五8) 割ワキ敏メラ之 (五〇14) 代シラム (四六6) 尽ツクトモ (二四2) △尽1▽ 宣イハム (四六

- 5) 走ハセ (六12) 隔ヘナテ (二四8) △隔2▽ 成ナリ (六8) 堀ホリ (二〇1) △堀リ1▽ 勝マコトコト (二六11) 咽ムセヒユ (二八11)

- 典ユカス々タモ (四六5)

四、辞の部分表記

先に受身の助動詞「る」が「厚覆テ」のように表記されない例を見たが、これは漢文を訓読するとき、出会う現象でもある。これに似而非なるものに、助詞・助動詞の上部音節の表記されないものが僅かながら存する。

「のみ」阿防獄卒ノ呵責ノ音ミ耳ニ満テ (六4)

右は「多百由旬ノ猛火ノミ眼ニ見テ」と対句をなしている。

「たり」面輪相円シテ似ニ秋月 (二六10)

尊敬の「給ふ」については5例認められる。

(今日導師ハ) 一代説教懸鏡源底ヲ解ヘリ (八4)

右は「解^{ときたま}へり」であろう。同様の例の中に「出マフ」はこの推定に根拠を与えてくれる。

山ニ被捨^ヒテ(四三13) 求^{ニヒキ}无上道^ヲ(五〇5) 證^{ニキヒ}仏果^ヲ也(五〇6) 将^{ニテ}連匿^ニ出マフ王城ノ[□](五二5)

次の「崇^{ラム}」は「崇^{あがめたまふ}ラムト」ではなからうか。

早ク将還^テ本ノ王宮ニ崇^{ラム}ニ云テ(四四4)

以上、送り仮名および振り仮名について調査を報告してきたが、活用語尾表記に及ぶことができなかった。未だに解読と
いうに程遠い状況の仏教説話集について、表記の体系を考へること自体無理なところであった。体系というには余りに漏れ
るところ多く、舐れてきたところも不十分である。ただ、概要は記しえたかと思う。まずはもう一度も二度も解読に沈潜す
べきであらうと思つている。

注

- (1) 『鎌倉時代語研究』第一輯(昭和五十三年三月、鎌倉時代語研究会)
- (2) 春日和男編『新編国語史概説』第二編第三章中世I(昭和五十三年、有精堂)
- (3) 山内「法苑珠林と諸経要集」(金沢文庫研究20巻9号、昭和四十九年九月)
- (4) 「金沢文庫所蔵仏教説話集について」(『国語と国文学』19巻12号、昭和十七年十二月)
- (5) 「句字考」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』、昭和五十一年十二月、表現社)